

正しい批判はいかにあるべきか (二)

——教条主義批判を装った修正主義——

山本二三丸

まえがき

第一節 予備的注意

第二節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その一)……(以上、本誌第二十一卷第一号所載)

第三節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その二)……(以上、本号所載)

第四節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その三)

第五節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その四)

第六節 榊氏による修正主義批判

第七節 榊氏の「教条主義批判」の客観的意義

むすび

第三節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判(その二)

一

榊氏が拙著『構造改革論批判』を批判する攻撃論文——「修正主義批判を装った教条主義」——の冒頭にかかげられ

正しい批判はいかにあるべきか (二)

一

た主張、すなわち、「わが国のマルクス・レーニン主義者」が「たえず右翼日和見主義、修正主義とたたかってきた」とりわけ、この数年来、国の内外でつよく現われてきた現代修正主義にたいしては先駆的な闘争をおこなってきた」という主張が、どのようなものであるか、いったい、それは事実によって裏付けられるものか、それとも全くの空文句であるかということは、前稿でみたように、適切な事例によってみごとに実証されているのであって、それは、ほかでもない日本共産党中央委員会理論政治誌「前衛」第一八二号(一九六一年六月)の巻頭論文「日本の『構造改革論』者によるマルクス・レーニン主義のわい曲」である。この論文は、ソ同盟共産党第二〇回大会の「フルシチョフ同志」の報告をば完全に「マルクス・レーニン主義」に合致したものと断定し、これを積極的に支持し、この「正しいマルクス・レーニン主義」的報告を「わが国の『構造的改革論』者」が「歪曲」しているといつて、後者を非難攻撃しているものである。それは、「現代修正主義」の巨頭の報告と「先駆的な闘争」をおこなうどころか、むしろ、これに「先駆的な支持、賛辞」を与え、これを積極的に擁護したものである。「一九五六年の第二〇回大会当時から次第に発展してき、一九六一年一〇月の第二二回大会で体系化をとげつつあることが明確化された」と神氏によって断定された「フルシチョフ」に代表される現代修正主義」の正体を見ぬくことがまったくできないばかりか、これを完全な「マルクス・レーニン主義」だと主張して積極的に支持しているこの論文、「わが国の『構造的改革論』者」にとって、「フルシチョフ報告」および「イタリアの道」が唯一絶対の理論的支柱となつていふ事実が、全然理解できないばかりか、この「フルシチョフ報告」および「イタリアの道」を「マルクス・レーニン主義」理論だとして、これをもつて「わが国の『構造改革論』者」を批判できると考え、また事実批判しているこの論文、—これはまた、なんとおどろくべき「現代修正主義」追随の擁護論の典型的な論文であることか!—とところで、この論文の執筆者は、骨の髄か

らの反「マルクス・レーニン主義者」であろうか？ いや、とんでもないことである。この論文の著者は、誰であろう、もっともすぐれた「わが国のマルクス・レーニン主義者」であり輝やかしい「指導者」でいられるところの、袴田里見氏そのひとなのである。

(1) この事実こそきわめて重要であつて、それゆゑにこそわたしは、『構造改革論批判』の冒頭の「序」のまっさきに、

「本書はこんにちマルクス主義陣營のなかでの代表的な修正主義的理論として世界的に重要な役割をはたしている構造改革論について、その理論的内容を分析したものである。ここでとりあげられているのは、みづから構造改革論と名のついている日本の代表的な『マルクス主義者』たちの主張と、その国際的支柱となつているソ同盟共産党およびイタリー共産党の現指導層の平和革命論であり、したがつてもっとも正統的な構造改革論である。」(前出、一ページ)

と述べて、この「国際的支柱」たる「平和革命論」の吟味にその第二章全部をあて、その修正主義的本質の究明に力を注いでいるのである。

ところで、榊氏は、その著者『現代修正主義とはなにか』の第五章「現代修正主義が大きな国際的潮流に」の中で、「わが国のマルクス・レーニン主義者」と「フルシチョフ修正主義」との関連をつぎのように説明しておられる。

「わが国における修正主義との関連でいえば、一九五八年の日本共産党第七回大会から六一年七月の第八回大会までの期間に春日庄次郎、内藤知周に代表されるような反党修正主義者が出たのであるが、この頃にはまだ反党修正主義者をフルシチョフらが公然と支持することはなかった。ところが、一九六四年段階では志賀義雄、鈴木市蔵らの新たな修正主義者をたきつけ、これを公然と支持するばかりか、かつては支持を『控え』ていた春日、内藤らをも同様に支持するように進化していた。こうした変化もまた、フルシチョフのユーゴ修正主義への接近・癒着、フルシチョフに代表される現代修正主義潮流の形成・発展に照応したものである」(前出、一一〇ページ)。

ごらんのように、「フルシチョフの現代修正主義」と「わが国における修正主義」との「関連」という問題について、榊氏がとりあげられるのは、「フルシチョフ」が「わが国の修正主義者」を「公然と支持する」かどうかという、個人的・政治的関係だけである。「関連」の問題をこのように個人的・政治的関係にゆがめ、矮小化してとらえるのは、はたして「マルクス・レーニン主義者」として正しい態度であらうか？ 榊氏は「現代修正主義潮流」という文字を、わけわからずに使つていられる

正しい批判はいかにあるべきか(二)

ようである。「潮流」ということは、主として理論的、思想的関連を指しているもので、人的・政治的関係は二の次ぎである。ところで、「わが国の反党修正主義者」を「たきつけ、これを公然と支持する」ような「フルシチョフ一派」の主張は、「報告」を、「公然と支持し」てこれをつばな「マルクス・レーニン主義理論」として擁護するような者がいたとしたら、榊氏は、いったい、このひとをなんと評されるであろうか？ 氏の卒直な「マルクス・レーニン主義」的批評をききたいものである。

以上の事実を照らしてみると、「先駆的な闘争をおこなってきた」という虚構にもとづいて述べたてていられるつぎの主張が、同じくまったく根も葉もない空文句であって、事實はむしろその反対であったということが、明瞭にうかがわれるのである。

「それによって、修正主義の危険な役割と本質はしだいに多くの人びとに理解され、修正主義の理論的、実践的破綻もきわめて明瞭になってきた」。

それゆえ、右の空文句をば、事實に合致した文章によっておきかえるならば、つぎのようになるであろう。――
「右のような『フルシチョフ同志の報告』の支持、礼賛によって修正主義の危険な役割と本質は人びとによって理解されるどころか、ますます隠蔽されるようになり、わが国における修正主義の理論的・実践的勝利もきわめて確実なものになってきた」と。そして、わたしは、行論において、事實をもって右の文章が真実をとらえたものであるかどうかということを実証することにしよう。

ところで、榊氏は、右にみたように、なんら事実をもって裏付けることなく、ただ「わが国のマルクス・レーニン主義者」が「修正主義とたたかってきた、先駆的な闘争をしてきた、そして、そのおかげで修正主義が理論的・実践的に破綻してきた」と述べただけで、ただちに筆先きを転じて、「修正主義批判の労作が数多く生まれているが、

なかには、警戒しなければならぬ現象もあらわれている」と主張され、つぎのように「警戒すべき現象」を説明されるのである。

「それは、表面的には修正主義批判をこころみながら、実質的には、マルクス・レーニン主義の確固たる立場からそれをおこなうのではなく、逆の誤った極点から修正主義を『批判』し、それ自体が有害な教条主義的ないし反マルクス主義的見地におちいつているという奇怪な現象である」。

このような榊氏の主張や説明は、わたしには、事実に合致した、きわめて正しいもののように思われる。ただし、最後につけくわえられている「有害な教条主義的」という文字を削除したかぎりでは、である。さきにもたように、「フルシチョフ報告」を「マルクス・レーニン主義」だとして、これをもって「修正主義批判」をおこなうといううな「労作が数多く生まれている」のであるから、これは、われわれとしては、当然「警戒しなければならぬ現象」である。また、そういう「フルシチョフ」支持の論文は、「表面的には修正主義批判をかかげながら、実質的には、マルクス・レーニン主義の確固たる立場からそれをおこなうのではなく、逆の誤った極点から修正主義を『批判』、つまり擁護し、それ自体が有害な反マルクス主義的見地におちいつているという奇怪な現象である」。ごらんのように、まさに、事実にびつたりではないか。

ところで、「わが国のマルクス・レーニン主義者」、榊氏のお智慧は、そこにいちはやく「有害な教条主義的」という文字を挿入されたところに、よく示されている。

「共産主義の基本原則」を守ってその修正主義的歪曲にたいして徹底的に仮借なくたたかう真の「マルクス・レーニン主義」者にたいして、修正主義者の側からの非難攻撃は、いつでもきままって、真の「マルクス・レーニン主義」

正しい批判はいかにあるべきか(二)

者をつかまえて、「教条主義者」というレッテルをはりつけることによっておこなわれる。このばあいには、真の「マルクス・レーニン主義」者が擁護している「共産主義の基本原則」についていっさいふれることなしに、したがって、「共産主義の基本原則」をどのように「教条主義的」に適用し主張しているかということを実例をもって示すことなどいっさいせずに、——正確には、示すことが全くできないので、というべきである、——ただやたらとレッテルをはりつけることしかないし、またそれ以上のことはできないのである。なぜというに、その擁護している「共産主義の基本原則」がどんなものかということがちよつとでも明るみに出ると、当の修正主義者がこれを完全に歪曲しているという事実そのものはつきりと表面にあらわれることになってしまうからである。

榊氏はじめ「わが国のマルクス・レーニン主義者」やその「指導者」たちが、現代修正主義とどのようにたたかっていたかということ、行論においてとくと検討されるところであるが、しかし、さきにあげたたった一つの事実によつてみても、それが「マルクス・レーニン主義の確固たる立場」に立つて、「共産主義の基本原則」を明らかにすることによつて徹底的な批判をおこなうということとはまったくちがって、むしろ「修正主義」というレッテルを他人に貼りつけることによつて、現代修正主義支持という実質が隠蔽されているという傾向が濃厚であつたということが知られるのである。このように「共産主義の基本原則」を明確にすることなしに「修正主義」のレッテルをはりつけることによつて「修正主義批判」の形式をとつていながら、実質的には修正主義と徹底的に闘争してはいない——蔽密には、むしろ、これを支持しているというべきだが、——論者が、「教条主義」という言葉を口に出すのは、「共産主義の基本原則を明確」にしてこれをあくまで擁護し、これを歪曲したり、その歪曲を大目にみたりする「修正主義」者や、「修正主義批判」者の正体を暴露しなければやまない徹底的な修正主義批判というものが、その論者

自身の方にも向けられるはずだということを、よく感じとっているからなのである。こういう論者には、この論文のはじめに注意しておいたように、「修正主義」とか「教条主義」という言葉の本当の意味と、それらの関連とちがいを明確にすることはできないと同時に、また明確にされることはすこぶるまづいのである。

それゆえ、榊氏が、右にみたようにいちはやく「有害な教条主義的」という文字を挿入されたことは、右のような歴史上の一法則——すなわち、一定の条件のもとに修正主義者によって必然的に行りつけられるレッテル用語という法則——がまだその効力を失っていないことを示すものとみてよいであろう。ただし、これは、さきに挙げたたった一つの実例よつての推論にすぎないので、さきにいつて、事実をもつて検証してみることが必要ではある。

そこで、榊氏は、おそらくかねて意図されていたところにしたがつて、右のように「有害な教条主義的」という文字をいちはやく挿入されたところで、「マルクス・レーニン主義は『一つの戦線』での闘争をつうじて発展・強化していくものである」という一般の真理をかかげることによつて、だがまた「わが国のマルクス・レーニン主義者」にはけつしてあてはまらないような一般の真理をかかげることによつて、「われわれは依然として修正主義との原則的な思想・理論闘争を強化しなければならないが、他方の教条主義との闘争もつよめなければならない」と主張されて、はやくも、批判の重点を「現代修正主義批判」から「教条主義批判」へと移しかえることをつよく主張される。いや、もつとはっきりいえば、「修正主義批判」を完全に放棄して、もつばら力点を「教条主義批判」にうつすことを主張されるのである。なぜならば、「この数年来」「修正主義との原則的な思想・理論闘争」は事実見られなかつたのであり、したがつて「依然として」「強化しなければならない」という言葉は、むしろ「フルシチョフ支持」ということに結びつきがちであり、かりに一步ゆづつてみても、修正主義とのありもしなかつた闘争は「強化」しようもな

正しい批判はいかにあるべきか(二)

いからである。

以上のようにして、「わが国のマルクス・レーニン主義者」の「先駆的な闘争」によって「現代修正主義」は首尾よく「批判」され片づけられたのであるから、これからは他の一面である教条主義と——それも、とくに「修正主義批判」と銘打った教条主義と——闘争しなければならぬという論法で、たくみに読者を誘導してこられた榊氏は、ここで、「修正主義批判」と銘うった教条主義というものの実物を読者の前に出してみせるということになる。その見本としてとりだされたものが、藤本進治氏とわたしの著書というしだいである。見本であるから、もとより、論証などいっさいぬきである。いきなり、

「この二著とも、『修正主義批判』と銘打たれているものの、具体的な内容は、マルクス・レーニン主義の原則にしっかりと立ったものではなく、かえって、教条主義的・セクト主義的傾斜のものである。」

と、きめつけ、

「それらが『修正主義批判』と銘うっているだけに、良心的な人びとがまどわされやすいので、ぜひとも一言ふれておかなければならない。」

というようにして、いかにも「マルクス・レーニン主義」の見地から良心的な読者のためにこれを批判・打倒してあげるのだといわんばかりの言辞を並べたてていられるのである。

ごらんのように、榊氏は、拙著の「具体的な内容は」という言葉をつかわれて、さも拙著の「具体的な内容」をよく読まれているような口ぶりをされている。おそらく、榊氏も、拙著の「具体的な内容」はひととおり眼を通されたかもしれない。だが、「見れども見えず」という諺もある。それに「わが国のマルクス・レーニン主義者」にえてし

てありがちな先入主をもって読まれたのでは、肝腎のところはつかめず、白は黒と映るばかりであろう。であるから、これから、**事実**によって、いったい、榊氏が拙著の具体的な内容を読んで、それを知っていて批評されているかどうかを、吟味することにしよう。そして、同じく**事実**によって、はたして、拙著の内容が「マルクス・レーニン主義の原則にしっかりと立ったもの」でないかどうかを確かめることにしよう。このようにして、**事実**をもって榊氏の非難攻撃の中味を検証することは、これまでわれわれが見てきた**事実**に照らしてみるだけでも、きわめて緊切であり、時宜をえたことだと考えないわけにはいかない。それによって、はじめに、「良心的な人びとがまどわされやすい」のは、拙著『構造改革論批判』によってであるのか、それとも、「わが国のマルクス・レーニン主義者」榊氏のレッテルはりであるのか、ということが、うたがう余地なくはっきりと示されるはずである。そこで、次節から、榊氏の論文の「三」以下をとりあげ、拙著の「具体的な内容」と対比して、榊氏がそれをどのように非難されるかということを考察することにしよう。

二

榊氏は、その『修正主義批判』というが……というマス・コミばりの題名をつけた第三節のはじめで、「つぎに、藤本氏とは若干ちがうが、山本氏の『構造改革論批判』も、修正主義批判を銘うちながら、多くの問題をもっている」という、さきにはりつけたレッテルをただりかえされるだけで、早速つぎのように非難の言葉を投げかけていられるのである。

「山本氏は序文で『中国共産党指導部による』修正主義批判の『論点および結論部分』がその著の『主張と軌を一

にしている』とのべ、『このことは科学的理論の正しさとその威力をあらためて実証』してしているとのべている。外国の主張との一致で自著の『正しさと威力』を実証しようとする事大主義的、權威依存主義的態度にも首をかしげないわけにはいかないが、それよりも、具体的なその内容である。」

どうやら、榊氏は、「時間的な都合のために」、拙著『構造改革論批判』のうちの最初の「序」(約三頁)と最後の第四章「総括」(約二〇頁)だけに眼を通して、批判論文をものされてるように見うけられる。その、たしかに眼を通されたかと思われる「序」の部分についても、榊氏は、はじめから、これを文字通り読むことは節約されているのである。まず、事実を知っていただくために、榊氏が引用された個所の全文をあますところなく、つきにかかげよう。

「わたしは、右の世界史的現象〔現代修正主義の國際的流行〕の重要性を考慮して、これらの修正主義的思潮に分析のメスを入れ、一九六三年はじめに、「いわゆる『構造改革論』の理論的性格」という題名のもとに、およそ九回にわたって——雑誌『立教経済学研究』誌上に——論文を発表してきたが、一九六五年九月に一応の完結をみたので、ここにあらためて草稿全体に手を入れ、一本として世に問うことにした。論文草稿の大体は一九六二年末にできあがっていたが、誌上発表の紙数と連続回数に制限があり、かたがた印刷がおどろくほど手間どり、そのために論文完結には四年近くの歳月を要した。その間に中国共産党指導部による國際修正主義の批判が発表され、精力的に展開されるにいたったが、その批判論点および結論部分についてみると、本書の主張と軌を一にしているものだという点を指摘しておきたい。このことは、科学的理論の正しさとその威力をあらためて実証するものとして、わたしには、とくに感銘深いものがある。」(前出 二一三ページ、傍点およびゴシック体——山本)。

さきにも前稿でも指摘しておいたように、拙著『構造改革論批判』⁽²⁾がとりあげて検討・批判しているのは、わが国の「構造改革論」者の代表的見解——『構造改革とはどういうものか』(一九六一年刊)とその理論的支柱となっている「フルシチョフ報告」(一九五六年)であって、これらのものについての批判論文の草稿は、すでに一九六二年末までに大体出来上っていたが、ここに述べてあるように雑誌掲載上の制限と印刷のおどろくほどの遅滞によって、その発表は、一九六三年二月にはじまり一九六五年九月をもってようやく完結をみる事ができたのである。ところで、一九六一年から一九六二年にかけては、「フルシチョフ報告」にたいする批判はまったく見られず、あるのは、ただ、さきにも「前衛」第一八二号の巻頭論文のように、「フルシチョフ報告」にたいする無条件の追隨と絶対的礼賛の言葉の羅列ばかりであったのである。このときに、わたしは、「フルシチョフ報告」こそが——「イタリアの道」となる——わが国の「構造改革論」者にとつての強固な理論的支柱となつていることを見きわめ、この「フルシチョフ報告」の内容を厳密に検討することにとつとめ、それによつて、この「報告」が、レーニンの主要な諸労作で明示されてゐる「マルクス主義の基本原則」を歪曲し、これをおどろくほど改ざんしてゐるものであつて、「マルクス・レーニン主義」への完全な裏切りであることをつきとめたのであつた。そこで、はじめにわが国の「構造改革論」の詳細な批判をおこない。ついでそれとの緊密な理論的関連を明示して「フルシチョフ報告」の徹底的な批判をおこなうこととして、最初の原稿部分——「いわゆる『構造改革論』の理論的性格」——を書きあげたのが一九六二年十一月八日、それが雑誌「立教経済学研究」(第十六巻第四号)誌上に発表されたのは一九六三年二月であり、さらに、稿が進んで「フルシチョフ報告」についての批判の部分が発表されはじめたのは、一九六四年八月の同誌第十八巻第二号の同論文(六)からなのである。「フルシチョフ報告」にたいする無条件の頌歌が高まつている最中に、わたしひとり

正しい批判はいかにあるべきか(二)

で、ただマルクス・レーニンの教示だけを抛りどころとして、このソ同盟共産党の輝やかしい最高「指導者」の「報告」を批判することは、すくなくならず勇気を要することであったが、わたしは、マルクス・レーニンの諸労作を貫ぬくマルクス・レーニン主義理論の正しさへの確信に元氣づけられ、これを忠実に学びとり撰取することを第一とし、それを精神的抛りどころとして、はじめてその批判を最後までなしとげることができた——もちろん、不十分なものはあるが——ように考えるものである。ところが、わたしが最初の論文部分を発表してから、まもなく、中国共産党指導部によるソ同盟共産党指導部にたいする批判がはじまり、ついで、その批判はフランス、イタリーの共産党指導部の見解の批判に拡がってゆき、たとえば、一九六三年六月十四日の「国際共産主義運動の総路線についての提案」(ソ連共産党中央委員会の一九六三年三月三十日付の書簡にたいする中国共産党中央委員会の返書)にみられるように、「資本主義から社会主義への移行」の変革路線についての原則的意見の相違が明るみに出され、しだいに「フルシチョフを頭とする国際的な現代修正主義」の本質が暴露されるようになってきた。この国際的な現代修正主義の暴露と打倒は、実に、「マルクス・レーニン主義の基本原則」を忠実に守る中国共産党指導部の側からの精力的かつ徹底的な批判によってはじめて遂行されたものである。「わが国のマルクス・レーニン主義者」はどうかといえ、一九六一年当時においては、「フルシチョフ報告」を絶対に支持してこれに追隨していたことは、さきに事実をもって示されたとおりであり、この追隨と支持とのさなかに第八回党大会(同年七月)で、「フルシチョフ報告」の線に忠実にそつた「日本共産党綱領」が満場一致で可決、決定されているのであって、「わが国のマルクス・レーニン主義者」とソ同盟共産党指導部とのこの緊密な関係が変つて、前者が後者をにわかになんぞに非難するようになったのは、——おそらくは中国共産党指導部の側からの断固たる徹底的批判の展開に刺戟されたことと推察されるが、——一九六三年に

なって生じた「部分核停条約」をめぐる意見の不一致という「事件」からであり、ついで、後者が「除名」された志賀義雄、鈴木市蔵両氏を積極的に支持するにおよんで、公然たる決裂状態にはじめて入り、フルシチョフらにたいする前者の公然たる批判と非難は、フルシチョフ解任（一九六四年十月）後にはじめて入り、フルシチョフを現代修正主義の巨頭と名ざして公然たる批判論文が発表されたのは、ようやく一九六五年に入ってからのことである。だが、この経緯については、いづれ行論において考察を加えることにしよう。問題は、赫氏が、事実をどのようにとらえて、良心的な読者に伝えていくにある。

(2) 本誌第二十一卷 第一号（一九六七年五月）、四一ページ参照。

(3) わが国の『構造改革論』についての批判は、これよりさきにわたしははじめており、たとえば、その代表的な理論家、井汲卓一氏その他の諸氏の所論についての批判論文を、一九五八年十一月の『経済評論』誌上に、『現代資本主義論』の性格について」と題して発表している。（この論文は、のちに一九六二年七月刊行の拙著『現代資本主義の経済法則』の中にその「Ⅳ」として収められている）。この論文の最後の「四『平和的移行』については、いうまでもなく、フルシチョフ流のいわゆる「平和革命論」を批判したものであるが、その末尾におかれた結びの文章は、当面の問題にとつてもすくなくからず意義をもつものと思われるので、煩をかえりみず、つぎに引用してかかげておこう。

「最大限利潤確保のためにありとあらゆる力が動員され、強力がいたるところに配置されて、帝国主義による支配強圧の体制が固められているとき、しかもわれわれ自身ふところの財布ばかりでなく、咽喉元どから頭の中まで着々と締め上げられつつあるこのとき、資本主義は変わったとか、国家の性質が変わったとか、独占資本主義も平和に社会主義に成長できるとかという理論を宣伝してまわっている人たちは、はたして、誰のための『理論家』というべきであろうか」（前出拙著、二八八ページ、傍点——原文のまま）。

以上のような経過を辿って『構造改革論批判』の内容が出来あがり、一九六六年四月公刊されるにいたったとき、そして「フルシチョフ報告」にたいするわたしの徹底的な批判の論点とその結論部分が中国共産党指導部による国際

修正主義批判の論点および結論部分と、ほとんど一致しているということを見出したとき、わたしは、「マルクス・レーニン主義の基本原則」の見地に立ち、これを正しく把握して的確に適用することを学びとるならば、この「マルクス・レーニン主義」理論(科学的理論)は完全に正しい、強力な理論的武器として必ず役立つものであり、その用い方、その「効果」はつねに同じく的確なものであるということについてゆるぎない確信をもち、また、そのことをつたない自身の努力の成果を通じて実感することができたことにこの上もない感銘をおぼえずにはいられなかったのであって、わたしは、そのことを卒直に、右のような文章であらわしたのである。わたしが強調しているのは、「マルクス・レーニン主義」理論こそが唯一の科学的理論であり、この科学的理論を刻苦して理解し自分の身につけることができれば、その「基本原則」についての言葉巧みな歪曲や変造のころみかどんなにおこなわれようとも、これにすこしも惑わされることなく、かえってその正体を見ぬくことができ、「基本原則」のどこを、どのよう、に歪曲し変造しているかということ暴露でき、これによってさらにいちだんと科学的理論の正しさ、偉大さを実証することができるということ、「マルクス・レーニン主義」こそ、唯一の正しい、科学的な理論的武器であるということ、このことである。わたしは、はっきりと、右の一致という事実そのものが、「科学的理論の正しさとその威力をあらためて実証するもの」と記しているのである。

ところが、「わが国のマルクス・レーニン主義者」である榊氏は、おどろいたことに、「中国共産党指導部による国際的な現代修正主義の徹底的な批判」をたんなる「外国の主張」という文字におきかえている。いったい、中国共産党指導部が、他の多くの国の共産党指導部がフルンチョフを支持したりこれに追隨して修正主義の太鼓もちになつているときに、決然としてその正体を暴露し、「マルクス・レーニン主義の基本原則」をその歪曲、改ざんから守る断固た

る闘争をおこなったということを、その完全に正しいマルクス・レーニン主義的批判を、たんなる「外国の主張」という一語で片づけるなどということが、どうして許されるであろうか？ それは、たんなる「外国」ではない、「中国共産党指導部」である。「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちが、アメリカ進駐軍を「解放軍」だとするような、まったく信じられないほどの反、レーニン主義的主張にかぶれていたときに、その頭に水をぶっかけてこれを正気になちもどらせてくれたところの、あの「中国共産党指導部」である。

榊氏よ、「わが国のマルクス・レーニン主義者」をもって自任されるからには、すこしは恥を知りたまえ。「中国共産党指導部」を「外国」という言葉で片づけることが、どんなにまちがっていることか、おわかりにはならないのか？ なんと、空しい偉らがりであろうか！

さらに、「科学的理論の正しさとその威力」というわたしの文字をむりやりねじまげて、この「科学、理論」という言葉を「自著」にすりかえ、「外国の主張との一致で自著の『正しさと威力』を実証しようとする事大主義的、権威依存主義的態度にも首をかしばないわけにいかない」というようにして、わたしの「態度」を非難・攻撃するということまで、やっつけていられる。榊氏よ、あなたの眼には、はっきりと記されている「科学的理論」という文字がそのまま映らなくて、この文字はどうしても「自著」と映ってしまわれるのであるか？ また、あなたの頭は、この「科学的理論」という文字を「マルクス・レーニン主義」理論を指すものとは理解できなくて、この文字をどうしても「自著」だと理解しないではいられないという構造になっているのであろうか？ それとも、わたしをなんとしてでも、「事大主義的」「権威依存主義的」だときめつけてやっつけたという意欲と熱情のあふれるあまりに「科学的理論」を「自著」というようにすりかえること、つまり、文字どおりペテンをつかうことが、このさいもつとも合目的だ

と判断されたものであろうか？

榊君よ、すこしは恥を知りたまえ。「マルクス・レーニン主義者」など持ちだすまでもない、ふつうの人間として、こんなベ、テ、ンをつかつて、「事大主義的、権威依存主義的」ときめつけることを、いったい、なんとも思われないのか？　これが、「名譽ある共産黨員」の「品性」にもっともかなったやり口と、お考えなのであるか？　「首をかきげないわけにはいかない」のは、まさに榊氏御自身のこのやり口であり、「わが国のマルクス・レーニン主義者」、「名譽ある共産黨員」の、かさにかかって党の権威をふりまわし、レーニンの明示した「条件」⁽⁴⁾なしの「規律」一点張りで事処理をするという「品性」そのものである。異なった意見にたいしては正しく説得するという「マルクス・レーニン主義」的方法をとることなどせず、またできず、自分の意見に従わない者は頭ごなしにやっつけ、非難攻撃して「これを亡きものにしようとする」という、「わが国のマルクス・レーニン主義者」のやり口をおそらくよく体得されたと思われる榊氏は、「現代修正主義を基本原則に照らして徹底的に究明し批判する」というわたしの主張をば「教条主義」としてやっつけてしまおうとあらかじめ目論みを立てられ、そのためにさまざまなレットルを用意されていたものと推察されるのであって、かくては、たちまち「事大主義的」「権威依存主義的」というレットルをはりつける段取りと心得られ、そのために、「科学的理論」を「自著」にすりかえるという思いきった手法もやむをえず、ということになったものと思われる。このようにみると、われわれは、すこしも「首をかきげない」必要はないのであって、「事大主義的」「権威依存主義的」というレットルは、むしろ榊氏御自身にうってつけのものであり、右の卑劣きわまる「すりかえ」＝ベ、テ、ンは、「わが国のマルクス・レーニン主義者」の「品性」の端的なあらわれだというところが、事實をもつて示されていることを、はっきりと確信することができるのである。

(4) 著書『共產主義内の「左翼主義」小兒病』の「二 ポリシエヴイキの成功の二条件」、全集第四版、第三十一卷、八一―九ページ。なおこの「条件」については前稿第一節において引用されてある。(本誌第二十一卷第一号、二一―二二ページ参照)。

そこで、榊氏は、右にみたように、「事大主義」「権威依存主義」むきだしの主張を根拠なしにかかげられたのち、問題は、拙著の「具体的な内容である」として、いよいよ「内容」の批判にうつられるのである。

三

榊氏はまず、拙著の「具体的内容」をつぎのように説明される。

「山本氏は佐藤昇、石堂清倫の『構造改革とはどういうものか』を主な材料として、『構造改革』論批判をこころみている」。

これによってみると、どうやら、榊氏が眼を通されたのは、拙著のはじめと終りだけ、それもほんの上っただけということば、事実のようである。というのは、その「まえおき」にある「本稿によって直接とりあげられている『構造改革論』は石堂、佐藤両氏編にかかる『構造改革とはどういうものか』の中に展開されているもの」(前出、八一―九ページ)という箇所はたしかに読まれたことがわかるからであり、しかも、そのさい、この中の「直接」という言葉を見落され、したがって、「その国際的支柱となつているソ同盟共産党およびイタリー共産党の現指導層の唱えている平和革命論」を批判することこそが本著の主要な課題となつてゐるという、「序」のはじめの説明(前出、一ページ参照)も、そして、その、「平和革命論」の徹底的批判のために拙著の半分近くの紙面が割かれてゐるという簡単な事実も、まったく氏の眼に入らなかつたようであるからである。これでは、「具体的な内容」どころのさわぎではないのである。

ところで、右のようななづさんな読み方、つまり大切な内容の見落としにもとづいて、榊氏は、

「このような批判をすることの積極性は認められるが、その批判のやり方、立脚点が深刻な問題をかかえている。」と述べられ、以下「問題」なるものを列挙されるのである。だが、佐藤、石堂両氏編の著書、『構造改革とはどういうものか』の「批判をすることの積極性」ばかり認めていられて、ソ国盟共産党およびイタリー共産党の現指導層の唱えている「平和革命論」にたいする徹底的な批判について、ひと言も述べられていないのは、いったい、どういふわけか？ 「わが国のマルクス・レーニン主義者」をもって自任される榊氏のことである。他人の著書を批判するからには、多分拙著についてもその内容は全部眼を通されたはずである。その「具体的な内容」の約半分が右の「平和革命論」の批判にあてられていることぐらゐ、おわかりにならないはずはない。だから、当然、「平和革命論」の徹底的批判がおこなわれていることは、知りすぎるぐらゐ知っていられるはずである。ところで、よく知っていられないが、なおかつ、その部分についてひと言もふれられず、まったく不問に付していられるという事実そのものは、はたして、どういうことを物語っているであろうか？ この事実があきらかにわれわれに物語っていることとしては、つぎのような事情以外には考えられない。それは、つまり、右の「平和革命論」の批判についてふれることは、「わが国のマルクス・レーニン主義者」にとつてはなほ都合がわるい、という事情である。わたしは、拙著の第二章『「平和革命」の理論』のなかで、右の「平和革命論」をとりあげ、「平和的方法」により、「議会的方法」によって資本主義から社会主義への移行を達成できる」という主張——戦略規定——が、レーニンの懇切に教示している「マルクス主義の基本原則」からいかにかけはなれたものであり、これを完全にふみにじったものであるか、どんなにそれがひどい歪曲、「修正」であるかということ、レーニンの教示と対比させつつ、詳細かつ徹底的に論究しているの

である。この第二章こそ、現代修正主義の本質を、その根源にまでさかのぼって追究するという課題をはたしているものなのである。それゆえ、この第二章をまったく無視するということは、その論者自身がそこで徹底的に追究されている当の「平和革命論」の支持者ないしは追隨者であって、この章にふれるとたちまち自身の本性を暴露しなければならなくなるだろうということをよく感じとっている、ということ物語るものである。まことに、レーニンの教示しているように、盗人は、その盗みをはたらいた場所を避けて通るものである。

それゆえ、榊氏が、「その批判のやり方、立脚点が深刻な問題をかかえている」と力んでごらんになっても、肝腎の「平和革命論」批判を全く見落して物を言っていられるのであるから、拙著の「具体的な内容」をよく知っていただける良心的な読者には、まったく効果のない空威張りとして、むしろあわれみの情を催させるだけであろう。

ところで、拙著の内容について、はじめとおわりと、さらにその見出しの半分とだけしかその眼に映らなかったお方のつかまえられた「深刻」な問題というものを、つぎに拝聴することにしよう。

第一の「深刻な問題」はつぎのとおりである。

「第一に指摘したいのは、一九五〇年度後半からわが国のマルクス・レーニン主義者によって精力的に展開されてきた『構造改革批判』の成果が本書ではまったく取りいれられていないこと、というよりも無視されていることである」。

榊氏よ、こんなことは「深刻な問題」でもなんでもない、まったく簡単なことである。事実についてみれば、すぐわかることだ。第一に、「一九五〇年度後半からわが国のマルクス・レーニン主義者によって精力的に展開されてきた『構造改革』論批判の成果」などというものは、まったく問題にならないからである。なるほど、「わが国のマル

クス・レーニン主義者」は、「わが国の構造改革論者」にたいして批判を——それも、マルクス主義の主要内容である経済理論の面からの詳細かつ徹底的な批判などというものではなく、まったく「政治的」な批判を——してきたことは事実である。だが、それがおこなわれたのは、「構造改革論」が「強力と独裁という共産主義の基本原則」を歪曲し改ざんする「平和革命論」であつたからでもなく、また、そのような修正主義的本質を暴露し、徹底的に批判するためでもなかつたのである。その批判がおこなわれたのは、「わが国の構造改革論者」が、まさに、「わが国のマルクス・レーニン主義者」のそれとはちがつた「平和的な方法」を唱えたからであり、そのために、自分の意見とちがつたものはやつつけずにはいられないといふ⁽⁵⁾、例の「品性」がどうしても発露せざるをえなかつたがためなのである。

だが、同じく「平和的・民主的な方法」を主張し、「平和革命論」を説くような者が、どうして、「構造改革論」の正しい、徹底的な批判ができようか!? それゆえ、正確にいうならば、「わが国のマルクス・レーニン主義者」によつては、精力的どころか、真の「構造改革論」にたいして、その言葉の意味に正しく相応するような批判は、いまだかつて一度もおこなわれたことがない、といふべきなのである。だが、しかし、もし、榊氏が「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちが、「構造改革論批判」という題名の論文を数多く書いているといふ事実だけをもつてきて、氏の主張を正当づけようとされるならば、わたしはこれにたいしてただ、つぎのようにお答えするだけである。——さきにあげた日本共産党中央委員会理論政治誌『前衛』第一八二号の巻頭論文、つまり「わが国のマルクス・レーニン主義者」の最高「指導者」であられる袴田里見氏の論文、「日本の『構造的改革論』者によるマルクス・レーニン主義のわい曲」は、いったい、どういう成果を示しているのか、はっきりとお聞かせねがいたい、と。第二に、「まったく取りいれられていない」とか「無視されている」といふことは、そういう題名をもつたさまざまな論文や著書を、わ

たしが知っていないということを示すことにはならない。「取りあげない」ということは、やはり、ひとつの「取り上げ方」を示すものだということが、唯物論研究者であられる榊氏に全然おわかりにならないとは、ふしぎである。わたしは、あれこれの論文や著書は読んで、すこしは知っているつもりである。だが、その内容をよく知っているが故にこそ、取りあげることをしなかったのである。榊氏は、「その成果がまったく取りいれられていない」といつて非難されるが、どうして、それらはみな「取りいれられる」ような性質のものではないのである。「取りいれられる」どころか、むしろ批判されるべきものであったのである。だから、わたしとしては、「取りいれる」のではまったくなく、「取りあげる」ということはできたのである。だが、それらを「取りあげる」ことをしなかったのは、つまり——もっと正確にいうならば——それらを「批判的に取りあげる」ことをしなかったのは、およそ、レーニンの「強力と独裁」という「共産主義の基本原則」についてもっと真剣に学習し、日本の諸条件について現実的な把握をするべく努力が払われたならば、それ自身の「修正主義の本質」についての自己批判が——まさにレーニンのいう、共産主義者の資格を実証するところの自己批判が——おこなわれるはずであり、自分とちがった意見を他人からとやかく言われることを排撃しないではおられないという「品性」の所有者には、しばらく時間をかすことが必要でもあり、適当でもあると判断したからであり、また、当時、フルシチョフ一派の現代修正主義にたいする中国共産党指導部の徹底的な仮借のない理論闘争がはなげなく展開されて、「わが国のマルクス・レーニン主義」者がこれまでしばしばつかってきた「還境に適應する」という「品性」がこのたびも有効適切に發揮されるであろうと推察したからである。これが、拙著の中で「まったく取りいれられていない」「無視されている」という事実の客観的な意味なのである。

正しい批判はいかにあるべきか (二)

一一一

(5) 同じ「平和的方法」を唱えている者でも自分の意見に従わない者はやつつけずにはいられないという、この「品性」の実体には、つぎのようなお題目が必要不可欠なのである、——「当面のさしせまった任務にもとづく民主勢力と広範な人民の共同、団結の必要を、世界観や社会主義革命の方法についての意見の相意などを理由としてこぼんだり、さまたげたりすることは、祖国と人民の解放の根本的利益をそこなうものである」(日本共産党綱領、傍点——山本)。そして、「祖国と人民の解放の根本的な利益をそこなうものであることになるのは、いつでもかならず、「わが国のマルクス・レーニン主義者」の意見に忠実に従わない者だけなのである。

つぎに、第二以下の「問題」は、小節をあらためて、検討しよう。

四

「深刻な問題」の第二は、つぎのとおりである。

「第二は、右のこととも深い関係があるとおもいますが、現実の『構造改革』路線への批判がまったく欠けていることである。いいかえれば、わが国の諸条件のもとでの変革の実践的課題と関連させての『批判』が欠けているのである」(ゴシック体——榊氏のもの)。

ごらんのように、榊氏は「現実の『構造改革』路線への批判」という言葉をつかって、そのなかの「路線」という文字をゴシック体にされ、このような批判がまったく欠けているとあって、拙著を非難されている。だが、榊氏よ、いったい、「現実の『構造改革』路線」というのは、どういう『構造改革』路線のことをいわれるのであるか? 『構造改革論』は、「資本主義から社会主義への移行」の変革路線にかんする理論であって、はじめからその中心は変革路線の問題なのである。ところで、この変革路線は、理論としてうちたてられ、また戦略規定として定式化されているものであって、そのごく一部がイタリーで「実現」されているだけで、その他の資本主義国では、とうてい「実現」

されるまでにはいたっていない。したがって、「現実にある『構造改革』路線」などというものは、イタリーを除いては、まったく存しないのである。またもし、榊氏が、この「現実の」という言葉は、その「路線」がすでに現実化しつつあるという意味にとるべきではなくて、実際に或る『構造改革』論者がつくりだしてみせた変革路線、ある特定の、現に唱えられている路線という意味でつかっているといわれるのであれば、われわれが批判の対象としてとりあげているのは、いつでもこうした特定の論者の描きだしてみせた現実の変革路線以外のなものでもない、お答えしなければならぬ。つまり、榊氏は、「現実の」という国語の正常な意味がよくおわかりにならずに、むやみやたらとここにおつけになられたものと思われる。そして、このような推察は、榊氏が、「現実の『構造改革』路線への批判」という言葉をいかえられて、「わが国の諸条件のもとでの変革の実践的課題と関連させての『批判』」ということだとしていられる事実によっても、裏書きされている。いったい、「わが国の諸条件のもとでの変革の実践的課題」という言葉は、どんなことを意味しうるであろうか？　まず、「わが国」を問題とするばあいには、いつでも特定の諸条件をもった「わが国」を考えなければならぬのであるから、「わが国の諸条件のもとでの」という言葉はいいかえれば「わが国での」ということである。また、「変革」は、いつでも、「観念の変革」ではなくて、客観的に存在する資本主義社会そのものの変革であるから、すぐれて「実践的」なものであり、したがってその「課題」はすべて、つねに「実践的課題」でなければならぬ。だから、右のもっともらしい言葉は、これをすっきりした日本語にいいかえれば、「わが国での変革の課題」ということにすぎない。ところで、この「課題」という文字については、榊氏は、すこしさきについて、「反帝反独占の民主主義的課題」という言葉を並べていられるところからみて、「反帝反独占」という「課題」を指してつかっていられると判断するのが、穏当のようである。

そこで、この「第二の問題」というのを、正常な国語をつかっていいかえてみると、こういふことになる。——わが国の『構造改革論』者が「構造的改良」という変革路線を規定するさいに、「反帝反独占」という変革課題をはっきりかかげていないのであって、このような変革課題をはっきりかかげていないという点を批判すべきなのに、山本はこれをしていない、それが「深刻な問題」だ、と。一見、もったいぶったような文章も、その内容をよくつかんでこれを正常な国語的表現におきかえてみると、ごらんのように、きわめて簡単明瞭なものであることがわかり、さらにその上に、それが論理的、理論的にみて、まったく支離滅裂であるという簡単な事実もよくわかるようになるのである。なぜならば、これによって、神氏が、「変革の方法」と「変革の課題」とをまったく混同していられることが、明瞭になるからである。

そもそも、「わが国での変革」を問題とするほどのひとで、「反帝反独占」が「わが国での変革の当面する課題」となっているということを理解しえないような論者があるだろうか？ また、かりにあったとしても、そのような論者については、『構造改革論』を批判するばあい問題とするにはおよばない、なぜならば、『構造改革』路線とは、まさにこのような「変革の課題」をどのような「方法」||「道」によって達成するかの問題にこたえるものだからである。そして、この「変革の方法」、つまり革命の戦略規定の中心問題にたいして、「平和的・民主的方法」、いいかえれば「議會的方法」を主張するところに『構造的改良』路線の眼目があり、かくして、「強力と独裁の方法」を排除するところに、その修正主義的本質が存するのである。だから、「反帝反独占」という「課題」をはっきりかかげないから「構造改革論」は誤りだというのは、一見もつともらしくみえるが、実はまったく的はずれの非難にすぎない。たとえば、「反帝反独占」の「課題」をはっきりかかげ、それを自分たちの専売特許だと称していても、その者が、「変革の

路線」という肝腎の問題において「平和的・民主的方法」に執着し、「強力と独裁の方法」を排斥しているならば、それは、りっぱな「構造的改良」論者であり、正真正銘の修正主義者なのである。

ところで、右のように、「変革の路線」と「変革の課題」という、密接に関連したものであるがしかした別々のものである二つの言葉について、まったく幼稚な混同をしており、この救いようのない混同にもとづいて、「構造改革論」者に見当ちがいの非難を浴せながら、しかも、その非難の鋒先きを、拙著に向けてくるという、まことに器用な「批判」を、榊氏はおやりになっているのであるが、拙著の内容そのものについての非難は、そう軽々には、うけられるわけにいかない。つまり、榊氏は、「構造改革」路線とはまったくはなれて、拙著そのものについて、それが「反帝反独占」の「課題」をとりあげていないという「欠陥」を指摘するのが狙いであって、「それだから、山本は、実践的課題と関連させての批判を欠いたのだ」というように、非難されようとしたのである。この非難は、形をすこしかえただけで、そのまま「第三」、「第四」、「第五」の「深刻な問題」として並べられている。つまり、「第二」から「第五」までは、まったく同じ非難が、ただすこし形を変えて並べたてられているにすぎないのである。この非難については、つぎの小節で、事実を挙げてこたえることにしよう。そのまえに、この「第二」の「深刻な問題」、つまり非難にたいしては、さきの検討をまとめて、つぎのようにお答えしておかねばならない。

すなわち、「わが国での変革の課題」に関連させての「批判」ということをもちだして、拙著が「現実の『構造改革』路線への批判」をまったく欠いているという、榊氏の非難は、二重、三重の意味で完全な誤りであり、重大な錯誤を示すものである。第一に、榊氏は、「変革の路線」つまり「変革の方法」と、「変革の課題」とを区別することができず、これをごっちゃに混同されている。第二に、「変革の課題」についての誤りを指摘することが「現実の『構造

改革』路線の批判」だと勘ちがいをしておられる。第三に、「現実の『構造改革』路線の批判は、まさに、「変革の方法」の批判、「平和的・議会的的方法」の徹底的批判をその眼目とすべきであるという、肝腎要めの論点についての認識が、まったく欠けておられる。第四に、拙著が、「強力と独裁の方法」という「マルクス・レーニン主義の基本原則」を明確にし、これにもとづいて「平和的・議会的的方法」を主張する「構造改革論」の修正主義の本質の核心をついているということについて、拙著を読まれながら、まったくその事実を読みとられず、また知ろうともされていない。これをつづめていえば、「構造改革論」とはなにか、「修正主義」とはなにか、なぜ「修正主義」というのか、両者——「構造改革論」と「修正主義」——の本質的関連はどうかという、当面もつとも緊切な問題についての、完全な無知と無理解がまさにここに露呈されている、ということができるのである。

五

さて、「深刻な問題」の「第三」と「第四」は、その内容をほとんど同じくするものであるので、まず、ひとまとめにして、その箇所をつぎにかかげよう。

「第三は、アメリカ帝国主義および、これと従属的同盟をむすぶ日本独占資本との支配という根本問題がほとんど無視されており、したがってまた、アメリカ帝国主義との闘争回避という『構造改革』路線の害毒はラチ外におかれていることである。

第四は、著者自身が日本独占資本の対米従属を正視していないために、事実上、日本を自立した独占資本主義Ⅱ国家独占資本主義国として諸問題を論議する結果になっていることである。一言でいって、日本の現実をふまえてい

ないのである」。

ごらんのように、この「第三」と「第四」では、拙著そのものが「対米従属を正視していない」ということの非難と、そのために「『構造改革』路線の害毒をば、拙著がラチ外にしている」ということの非難と、この二つの非難が並べられている。そこで、これら二つの非難にこたえるために、まず、「『構造改革』路線の害毒」の問題からみていくことにしよう。

榊氏は、「アメリカ帝国主義との闘争回避」ということをもってきて、これが「『構造改革』路線の害毒」であると、主張されている。だが、はたして、このような主張は誤りないであろうか？

「構造改革」路線とは、さきにも説明したように、わが国だけの特殊路線ではなく、現段階における一般的な、「資本主義から社会主義への移行」の道Ⅱ変革路線として主張されているもので、その核心は、まさに、その変革が「平和的・民主的方法」によっておこなわれるし、おこなわれるべきであるとするところにある。したがって、その害毒は、なによりもまず「マルクス・レーニン主義の基本原則」を歪曲し改ざんし、「これを亡きものにする」ところにあり、したがって、この「方法」ではそもそも「反帝反独占」などという「課題」はまったく解決できないばかりか、結局は「帝国主義および独占資本」との「妥協」に終らざるをえない。つまり完全な「変革闘争の回避」ということ、——これがその『害毒』の最たるものでなければならぬ。つまり、『構造改革』路線の害毒』というのは、『平和的・議会的方法』を主張する現代修正主義そのものの害毒と完全に同じものである。それゆえ、このような修正主義の本質から流れ出るもつとも決定的な害毒には一向に気がつかず、もっぱら、「反帝闘争の回避」という「課題」上の問題をもってきてあれこれ「害毒」を言い立てるのは、まったく的外れの議論でしかない。「構造改

「革」路線の「害毒」を論じたてている「わが国のマルクス・レーニン主義者」が、「反帝闘争」という「課題」をかか
げるのは、もとより当然のことであつて問題はないが、その「マルクス・レーニン主義者」がどんな「変革方法」を
とるか、はたして、「強力と独裁」という「マルクス・レーニン主義の基本原則」にそつた道をとるか、それとも現
代修正主義者に追隨して、「平和的・議会的的方法」をとるかということ、——まさにこの点にこそ決定的な問題が存
するのであつて、もし後者の「道」をとるならば、それこそ、「反帝闘争」というお題目を百万遍唱えようとも、客
観的には完全な「帝国主義との闘争回避」ということにならざるをえないのである。それゆゑ、わたしは、拙著にお
いて、「アメリカ帝国主義との闘争回避」という「害毒」をもつてきて、これが『構造改革』路線の「害毒」であるな
どという、見当外れの非難などは、しなかつたのである。拙著が明示しようとしてとめたのは、『構造改革』路線「す
なわち「平和的・議会的的方法」そのものの根本的な「害毒」であつたのであり、まさにその種の「変革方法」の修正
主義的、反マルクス・レーニン主義の本質であつたのである。だが、だからといって、わたしが拙著のなかで、この
点について、『構造改革』路線の批判にさいして「アメリカ帝国主義との闘争回避」という事実をまったく取りあげ
なかつたということには、けつしてならない。むしろ、その反対である。わたしは、「平和的・議会的的方法」がどん
なに「マルクス・レーニン主義の基本原則」に背反したものであり、これと眞つ向うから対立するものであるかとい
うことを、レーニンの教示に依拠して詳細に究明し、それがどんなに反革命的なものであるかを説明し、このよう
な直な「平和的・議会的的方法」をもつてしては「社会主義への移行」はとうてい不可能であること、そのような「道」
がとりわけ日本の現状のもとではどんなに非現実的なものであるかということの説明したのであるが、そのさい、と
くに外国帝国主義の強力による支配という条件を指摘し、この条件を考慮にいれるとき、「平和的・議会的的方法」を主

張ることがどんなにまちがっており、非現実的なことであるかを、強調しておいたものである。「平和的・議会的方法」では「アメリカ帝国主義との闘争」という、せつかくかかげた「課題」も画にかいた餅だと言っているのである。つまり、それは「闘争回避」どころではなく、まさに「闘争不可能」だということを、はっきりと説明しているのである。このような「外国帝国主義との闘争」の問題について拙著がふれていないと言うのは、根も葉もない非難であって、まったくもって驚きいった「品性」の発露というのほかない。はたして、拙著がこれについてまったくふれていないかどうか、わたしは、このことを、つぎの問題との関連において、事実をもって示すことにしよう。だが、それにさきだって、榊氏が「第三」の「深刻な問題」としてかかげられた非難のうち、「構造改革」路線の「害毒」にかんする部分についてのいわれなき非難にたいして、とりあえず、以上の説明をまとめて、つぎのようにおこたえておこう、——「『構造改革』路線の害毒はラチ外におかれている」というのは、拙著の内容をまったく知らない者の暴言であって、拙著は、むしろ、その根本的な「害毒」をこそ明らかにするために書かれているものである。だが、その「害毒」とは、けっして「アメリカ帝国主義との闘争回避」というところにあるのではなくして、まさに「平和的・民主的方法」への執着という修正主義の本質そのものにあるのであって、この修正主義の本質のために「アメリカ帝国主義との闘争不可能」という、いわば客観的な「害毒」がもたらされているのである、と。では、つぎに、拙著が「対米従属」を「正視」していない、「アメリカ帝国主義の支配」という「根本問題」を「無視」しているという、拙著にたいする榊氏のきびしい非難が、はたして、当を得たものであるかどうか、なによりもまず、事実についてみることにしよう。

わたしは、拙著『構造改革論批判』の第二章「『平和革命』の理論」のなかで、ソ同盟共産党第二〇回大会でのフ

正しい批判はいかにあるべきか(二)

ルシチヨフ報告が「平和的共存か、しからずんば全面的世界戦争か、二つに一つ」という論法で「平和共存」路線を合理化しようとしている点をついて、帝国主義国の対社会主義戦争開始は、二度の世界大戦を経てきた今日、帝国主義そのものの崩壊の危険を犯さずにははじめえないことを指摘し、

「だが、帝国主義そのものの本質については『根本的变化』はありえないし、したがって、帝国主義国内部での『力』による支配とならんで、他のいつさいの国にたいする、あらゆる『力』を動員しての支配の拡大と強化は、

——社会主義陣営の強化に対応して——ますます切実なものとなってきたのであって、この場合、あらゆる『力』による支配の達成の中には、いうまでもなく、『武力』の行使によるもの、いかえれば戦争を通じる諸方法もふくまれている。したがって、帝国主義の本質そのものがまったく変化せず、むしろ、『強力』による支配への必然的傾向がますます強められ、発現しつづつあるときに、社会主義にたいする直接的な戦争、しかも世界戦争だけを問題とし、この両陣営間の世界戦争を『未然に防ぐ可能性』ばかり論じているとしたならば、これは『世界革命運動』の指導という見地とはまったく縁のない、社会主義一国の利益のみに関心をもつ『愛国主義』の見地におちたものといふべきである。」(前出、二〇二ページ)

とのべ、さらに、そのような「平和共存」路線の誤りを、つぎのように指摘している。

「第一に、社会主義を直接相手とする全面的世界戦争に訴えるという方法が、きわめて困難かつ危険であることは、当の帝国主義者がよく計算に入れているところである。だが、そのような世界戦争でない、それ以外の戦争は、いくらでもやれるし、また現実に行っているのである。たとえば、社会主義国の周辺にある従属国を主役に仕立ててこれに対社会主義の戦争をやらせることは、天下周知の『手』である。また、後進国で国家権力を握っている者が多

少とも『社会主義的』であるときに、『親帝国主義』の一派に武力を供与して戦争により国家権力の奪取をおこなわせること——いわゆる『革命政権』の樹立——は、帝国主義者の後進国支配の常套手段となっている。周辺の従属国を主役に仕立てての帝国主義者の社会主義への武力攻撃がおこなわれて、帝国主義者の砲火、爆撃によっておびたしい労働者、農民の貴重な血が流されているときに、また、後進国でカイライ一派による『社会主義者』の大量殺戮がおこなわれているときに、『戦争は、はたして宿命的に不可避であるか』を『問題』にしたり、『世界戦争は防ぐことができない』などと『結論』づけたりしてみたところで、いったい、どれだけの意味があるというのであろうか？ これらの局地的戦争がくりかえされている事態を前にして、『平和的共存か、全面的世界戦争か、二つに一つ、第三の道はない』などというおしゃべりが、なんと底知れずに間抜けであり、また底知れずに悪質であることか。

第二に、全面的世界戦争によらずとも、また局地的戦争によらずとも、それ以外に、帝国主義者は、その『支配・強制の体制』を確保し強化するために必要な、さまざま『力』を十分もっており、またこれをつねに行使して自国民ならびに他国民の隷属——『賃銀奴隷の体制』を固めているのである。したがって、それらの支配・抑圧の強化方法のひとつとしての戦争を阻止することは、そのこと自体としてきわめて重大な意義をもっているものではあるが、しかし『マルクス・レーニン主義の教え』に照らしてみれば、つまり世界革命運動の主體的指導の見地からみれば、それではきわめて不充分であり、決定的な意義はもちえない。『戦争という手でいくか、『平和』という手でいくか』は、帝国主義者がその支配・抑圧体制の維持と強化のための不可欠の二つの方法のちがいにすぎない。問題は帝国主義の支配・抑圧体制の確保、強化という『本質』にこそあるのである。この点からみると、『戦争』をもつばら論じたてている当の報告が、『戦争は、別の——強力的な——手段による政治の継続である、』という、かのクラウゼヴィ

ツツの有名な格言の意義をすっかり忘れはてていることはうたがいない。『マルクス主義者は、この命題を、それぞれの戦争の意義をみるさいの理論的基礎であるといつも考えてきたが、それは正しかった』(レーニン)という、『偉大なマルクス・レーニン主義』の教えを忘却して、どこに『戦争の問題』の正しい解決があるうか(前出、二〇三—二〇四ページ、傍点およびゴシック体—山本)。

これらの引用文のなかで、わたしがゴシック体で示した文字に注意するならば、そして、第二次大戦後の現段階における帝国主義陣営内部でのアメリカの決定的地位を考慮にいれるならば、およそ、この地球上で資本主義国といわれるほどの国は、すべて、このアメリカ帝国主義の『力』による支配と強制の体制の網の目の中に多少とも包みこまれているものではなく、したがって、当然に「アメリカ帝国主義と、それへの従属関係」が問題とされねばならないということは、容易にわかるはずである。しかし、おそらく、榊氏は、これらの文章のふくまれている拙著第二章は、時間の都合上、一読の勞すらも省かれたものであろう。だが、すくなくとも、拙著の最後の第四章「総括」については、走り読みでも一度は眼を通されたはずである。もし、そうだとしたら、つぎの文章がはつきりと「対米従属」の問題の決定的意義を示しているという事実を、どうして「無視」されてしまったものであろうか？

「ところで、革命の主体的指導という問題を考えるばいに、第一に必要なことは、——右にみたように——その資本主義国内部のすべて、の階級勢力とその相互関係を、厳密に、客観的に考慮に入れ、評価するということであるが、しかしこれだけでは、まだ十分とはいえない。第二には、その国をとりまく諸国家の階級勢力とそれの当該国内の階級勢力との相互関係が、同じく、厳密に、客観的に考慮に入れられねばならない。この第二のことは、独占資本主義の段階、とくに第二次大戦後の国家独占資本主義の段階においては、**決定的に重要**である。こんにち世界の資本

主義国で、アメリカ独占資本と緊密な関係をもたない国はなく、またその帝国主義的支配の網の目の中に多かれ少なかれ包みこまれていない国はない。外国の強大な独占資本による帝国主義的支配という事実を冷静に、厳密に、客観的に評価しないでは、現段階における主体的指導はおよそ問題にならない」（前出、三二二ページ、傍点およびゴシック体―山本）。

さらに、わたしは、右の引用箇所最後の文章に、注をつけて、「構造改革論」者の重大な誤謬について、つぎのように明確な指摘をおこなっている。

「国家権力の本質については、『公共的機能』などという言葉でいくるめることもできようが、この帝国主義的支配の実態は、どんな詭弁でもごまかしきれない。『構造改革論』者がこの支配の実態について全然ふれることをしないという事実は、——注（36）で指摘した労働貴族層の見落としとならんで——じつに特徴的である」（前出、三二二ページ、傍点およびゴシック体―山本）。

ごらんのように、わたしは、「革命の主体的指導」という文字を用いて、「外国帝国主義の支配」の決定的重要性を指摘している。この「革命の主体的指導」というほうが、「変革の実践的課題」という榊氏のアイマイな言葉より、はるかに正確に、「マルクス・レーニン主義」の見地にそったものであることは、いまさら指摘するまでもないであろう。この点はおくとしても、これらの拙著の文字を読んだ人が、拙著にたいして、「アメリカ帝国主義および、これと従属的同盟をむすぶ日本独占資本との支配という根本問題がほとんど無視されて」といるとか、「日本独占資本の対米従属を正視していない」とか、よくもまあ、ぬけぬけと言いたることができたものである！ 榊氏よ、「日本を自立した独占資本主義」国家独占資本主義国として諸問題を論議する結果になっている」というあなた自身の文章

と、ここに引用してかかげた拙著の内容とを、いまここであらためてとくに見くらべていただきたいものである。とくに、わたしが、ゴシック体で示した文字を、どうかとくと「正視」していただきたい。そして、「アメリカ独占資本による帝国主義的支配の冷静・厳密・客観的な評価の決定的重要性」という文字を、どうして、完全に「無視」されたか、どうして、それが「アメリカ帝国主義および、これと従属的同盟をむすぶ日本独占資本の支配の無視」という文字としてあなたの眼に映ったのか、また、「帝国主義的支配の網の目の中への包みこみ、外国帝国主義の支配の実態」というわたしの文字を、どうして、「対米従属を正視せず、日本を自立した独占資本主義国として問題を論議している」という言葉でおきかえられたか、どうか、はっきりと説明していただきたい。

(6) 「アメリカ独占資本の帝国主義的支配」と「構造改革論者によるその無視」とについては、さきに本稿の注(3)であげた拙論の当該箇所の中にも明記されてあるので、あわせて御覧いただきたい。

「変革の実践的課題」が「反帝反独占」であるということなど、およそ、日本独占資本主義について初歩的な知識をもっているほどの者ならば、誰ひとりとして知らぬ者はないはずである。だが、「わが国のマルクス・レーニン主義者」は、この周知の「課題」の発見者は自分たちであり、また自分たちだけがそれを題目として使用する「専売特許」をもっているかのようにふるまって、よその人が「反帝反独占」という言葉をつかうと、すぐ、「無視」しているとか、「正視」していないなどといって、自分ひとりだけ正しいものだということを、自分たちをおいて他人は誰ひとりとして正しいことを主張できるものではないということ、誇示しようとする「品性」をもっているようであって、ここに事実をもって示された榊氏の完全な事実欺瞞、根も葉もないこじつけ、根拠のない「やっつけ」がなぜ必然的であったかを説明しうるものは、つまり、その「根拠」は、右のような、「わが国のマルクス・レーニン主義

者」特有の「品性」以外には、これを求めることは困難であると考えられるのである。

だが、「品性」の問題は、あとまわしにしよう。ここではるかに重大なのは、拙著のなかで強調されている『アメリカ独占資本による帝国主義的支配の冷静・厳密・客観的な評価の決定的な重要性』という明白な文字、そのものを、榊氏が「正視」することをされないばかりか、これをすっかり「無視」されてしまっているという、事実、そのものが「かかえている深刻な問題」である。「アメリカ独占資本による帝国主義的支配」という、明白な文字、すら「正視」することができず、これを「無視」してしまうような「わが国のマルクス・レーニン主義者」である。こういうひとが、「アメリカ独占資本による帝国主義的支配」という、動かしがたい**事実**、そのものについて、はたして、これをただしく「正視」することができるであろうか、これをすっかり「無視」してしまっただろうか？——これこそ、まさに「深刻な問題」として、われわれの前に浮びあがってくるものである。榊氏の批判論文のなかには、これまでみてきたように、「わが国の諸条件のもとでの**変革の実践的課題**」とか、「アメリカ帝国主義および、これと**従属的同盟をむすぶ日本独占資本との支配という根本問題**」とか、「アメリカ帝国主義との闘争回避という『**構造改革**』路線の**害毒**」とか、いったような、それこそ『**勇ましい**』ことば』があちこち配置されているが、これらの言葉は、**当の論者が**、「アメリカ独占資本による帝国主義支配」という**事実**について多少とも知っていることは示しうるが、しかし、それだけでは、とうてい、この**事実**を「正視」しているとは、いえたものではない。「反帝反独占」という「**変革の課題**」をかかげるだけのことならば、誰にでもできるのである。「アメリカ独占資本による帝国主義的支配」の**事実**、をただしく「正視」しているかどうかは、「**変革の課題**」ではなくして、まさに、その論者の提示する「**変革の方法**」のうちにそのまま映し出されているのである。それゆえ、われわれも、「わが国のマルクス・レーニン主義

者」のかかげる「反帝反独占」という変革課題のお題目にかかずらうことなく、まっすぐに、かれらの唱える「変革の方法」、つまり、「変革路線」の内容を「正視」することによって、はたして、かれらが「アメリカ独占資本による帝国主義的支配」の事実を「正視」しているかどうかを、冷静に、厳密に、しかも客観的に評価することをこころみなければならぬ。まさに、その主張する「た、た、か、い、方」のうちこそ、「深刻な問題」が存するのであって、われわれは、この点について、後段において、とくと吟味を加える必要があるのである。

六

さて、榊氏が拙著の中に見出される「深刻な問題」の「第五」は、つぎのとおりである。

「第五に、以上の諸欠陥(誤り)の必然的な結果として、反帝反独占の人民の民主主義革命の課題はまったくでないし、むしろ、プロレタリア革命を事実上当面する課題として押しだしていることである」(傍点―山本)。

ごらんのように、榊氏は、「以上の諸欠陥(誤り)の必然的な結果として」というように、述べていられる。この「以上の諸欠陥(誤り)」というのは、いうまでもなく、これまで検討してきたところの、「第一」、「第二」、「第三」および「第四」の「深刻な問題」ということである。ところで、これらの「深刻な問題」というのは、これまでおこなってきた事実にもとづく詳細な吟味によって、実はまったく根も葉もない虚構であって、「深刻な問題」が存するのは、むしろ、これらの事実そのものを「正視」しえない榊氏自身の論法にはかならない、ということが明らかにされたのである。それゆえ、「以上の諸欠陥(誤り)」という言葉そのものが、事実無根の、おしつけでしかなく、まして、その「必然の結果として」などという文句にいたっては、まったくの空文句でしかないということは、いま

さらうまでもないところである。ことに、榊氏の「品性」のほどをよく示しているのは、この「必然的結果として」という、「唯物論」的響きの言葉である。榊氏は、その「必然的結果として、反帝反独占の人民の民主主義革命の課題はまったく出てこないし」と言われている。つまり、「出てくるか、こないか」ということを問題にしておられるのである。ところで、右の「課題」は、それ自身で本の中から「出てくる」わけにはいかなないのであって、読者が本の中から「引きだして」やる以外には、出ようはない。だが、拙著を読んで、その内容から「反帝反独占」の課題を「引き出して」こないような読者は、「アメリカ独占資本による帝国主義的支配」というような明白な文字を「正視」できず、意識的にこれを「無視」しようとするような「品性」の持主だけだということほど、わかりきったことはまたとないであろう。榊氏としては、読み手のいかんにかかわらず、拙著からは右の「課題」がひとりだに「出てくる」ことはないというように読者を言いくるめるために「必然的結果として」という唯物論的言葉をおそらく配されたものであろうが、事実の物語っているところはこれとはまさに逆で、「以上の明白な文字を正視できず、これを無視したことの必然的結果として」まともな結論は「まったく出てこない」ということなのである。

もし、榊氏が、本当に正しい批判をされるといふのであれば、そして、右の「課題はまったく出てこないし、むしろ、プロレタリア革命を事実上当面する課題として押しだしている」と主張されるのであれば、なぜ、そのことを事実をもって実証されないのか？ なぜ、拙著の内容について、該当する箇所を指摘して、この文章によって、あるいは、この節の中で述べているこの箇所によって、「出てこない」し、「押し出している」ことはあきらかだ、というように議論を立てられないのか？ 「必然的結果として」とか「事実上」などという文句は、そのような事実を挙げて議論することのできない「諸欠陥（誤り）」をごまかすためのもので、まさに小細工というのほかないものである。

ところで、右の「第五」の非難のなかできわめて注目して値するのは、「反帝反独占の人民の民主主義革命」と「プロレタリア革命」とは全くちがったものだとする、榊氏の主張である。このような主張は、「第五」につづくつぎの手きびしい論難のなかにも、あきらかに貫徹されている。

「こうした基本的特徴がしめすように、山本氏の『修正主義批判』は実質的には、『修正主義批判』の名による教条的なプロレタリア革命論議であり、反帝反独占の民主主義的課題の否定論であり、日本共産党の革命路線にたいする異論の書となっている。しかも、最後の『総括』で山本氏が『残念ながらもまだこの国に、真に革命理論の名に値するものがつくりだされるにいたっていない』と嘆息を切るのをみると、氏の意図がどこにあるかを見せつけられるおもいである」。

榊氏は、「評論家」でいられるそうであるが、大切な概念規定について、とくに「マルクス・レーニン主義」の基本的な概念規定については、ほとんどまったく「正視」されないで、もっぱら「無視」されることで、評論を立てていられるようである。なぜというに、氏はごらんのように、「反帝反独占の人民の民主主義革命」といいながら、他方では「反帝反独占の民主主義的課題」といわれる。いったい、氏は、「反帝反独占」を「課題」とする「革命」はまさに「人民の民主主義革命」であって、それ以外の「革命」ではありえない、といわれるのであろうか？ もしそうだと*いわれるのであれば*、——そして、右の氏の非難文章から推せばそれ以外にはありえないが、——「反帝反独占」を「課題」としない「プロレタリア革命」というのは、いったい、どういう「革命」なのか、どんな「課題」をもつものであるのか、榊氏よ、どうかはっきりと説明していただきたい。「反帝反独占」を「課題」としていないような、世にもありがたい「プロレタリア革命」というものを、言葉の上だけでもつくりあげられるとは、まったくも

つてすばらしい「わが国のマルクス・レーニン主義者」の「品性」ではあるまいか。またもし、「反帝反独占」を「課題」としないような「プロレタリア革命」は現段階ではありえないといわれるのであれば、「反帝反独占」の「課題」の「否定論」が「プロレタリア革命論議」などとどう御自身の「勇ましい」断定がひどい錯乱を示しているだけだということをお認めにはならないであろうか？ 「反帝反独占」の「課題」を「否定」しているから「プロレタリア革命論議」である、「人民民主主義革命の否定論」だというのは、まことに見えすいたペテン論法であり、その「プロレタリア革命論議」という言葉の上に「教条的な」という形容詞までわざわざつけるといふ小細工を弄されたところで、氏自身の概念規定の粗雑さと底知れぬ混乱ぶり、そして例によって例のごときすりかえとおしつけはインペイしつくされるものでないのである。また、氏は、さきの「第五」のなかで、「プロレタリア革命を事実上当面する課題として」という言葉をつづっていられるが、いったい、「プロレタリア革命」をもって課題だなどと言うことが、言葉そのものとしても、成り立つであろうか！

要するに、榊氏のわたしにたいするこれらの非難の「基本的特徴がしめす」第一の「深刻な問題」は、氏が「人民民主主義革命」と「プロレタリア革命」とはまったくちがったものだという、まことに「品性」に相応わしい観念をかたく堅持されているという点である。

ところで、まだはるかに重大な問題がここに示されていることを見ないわけにはいかない。それは、「日本共産党の革命路線にたいする異論の書」という氏の言葉の意味である。いままでは「反帝反独占」の「民主主義的課題」というように、もっぱら「変革の課題」ばかり問題にし、この「課題」という言葉ひとつをあやつることで、拙著へのレツテルはりつけをあえてされてきた榊氏が、ここにきて、突如として、「革命路線」に話を移しかえられているので

ある。だが、この「路線」についても、説明はいっさいぬきである。拙著で述べている「路線」がどういうものであり、日本共産党の「路線」がどういうものかについて、事実による説明をいっさい省略しておいて、どうして、いきなり「異論の書」などと言うことができるのか？ 榊氏は、おそらく「反帝反独占の課題」をもってきて理由とされるであろうが、しかし、それは、拙著の中での修正主義批判からも当然「必然的結果」としてでてくるはずのものであって、これを「正視」できず、「無視」したりしているのは、榊氏おひとりなのである。とすれば、まったくわれのない言いがかり、というものである。

だが、榊氏は、その概念規定についての粗雑さと混乱、およびそのうえに是が非でも「教条主義」、「反共産党的」というレッテルをいちやくはりつけてしまおうという切なる衝動のために、事態を冷静に観察することもできなかつたし、また拙著の内容もよく読むことができなくていられたようである。そこで、「第五」以下にかんするかぎり、簡単に客観的に事態を観察し、拙著の内容の中で関連するところをぬきがきしてお目にかけることにしよう。

拙著は「現代修正主義理論」を批判したものであって、その核心は、「資本主義から社会主義への革命の道」Ⅱ「変革路線」の問題において、「マルクス・レーニン主義の基本原則」たる「強力と独裁の方法」を改ざんして、これを「平和的・民主的(議会的)方法」におきかえようとする修正主義の本質を究明・暴露するところにあつたのである。拙著の第二章『『平和革命』の理論』全部がフルシチョフ報告を、レーニンの教示との対比において、詳細かつ徹底的に論究しているのは、そのためであり、また、その第二章の末尾の(注32)において、その報告の中の一句——「議会内で安定した多数を獲得できれば……」——をとりあげて、それが反レーニ的な「平和的・議会的方法」に執着する修正主義者の反科学性を端的に示すものだということを明らかにしているのも、そのためである。ところ

が、一九六一年七月第八回党大会で満場一致採択された「日本共産党綱領」の中の肝腎の「変革路線」の中心には、右の一句がそっくりそのままとりいれられているという、事実があるのであって、拙著第二章の内容は、客観的には、「日本共産党綱領」の中の「変革路線」の「平和的・議会的的方法」の「修正主義的本質」を批判するものとならざるをえないという、事実関係があるのである。

それゆえ、榊氏が、拙著の内容を「正視」もせず、すっかり「無視」しさられることによって、拙著を「日本共産党の革命路線にたいする異論の書」だとされているのは、一方において、榊氏の「品性」の中での第六感の働きのとくに確かであることの証左ともなりうるし、また他方では、「変革路線」と「変革課題」との区別と関連がわけわからず、もっぱら、「課題」に執着してすりかえと、ペテンで拙著をやっつけなければならぬということの証左ともなりうるのである。わたしは、別に「啖呵を切る」つもりはなく、「日本共産党綱領」の中の右のフルシチョフ式「平和的・議会的的方法」の一句をそれと明示することもなく、ただ簡単に「わが国では、真に革命理論の名に値するものがつくりだされるにいたっていない」と記しておいたが、それは、右の諸事実とこれを取りまく諸状勢を考慮してのことであつたのである。それゆえ、もし榊氏が、よく物を見きわめる眼をおもちになつて、拙著第二章の内容をただしく正視され、「フルシチョフ報告」の「平和的・議会的的方法」の反レーニンの修正主義的本質をただしく「正視」されたならば、どうして拙著が「異論の書」となっているかを、第六感に頼ることなく、事実をもってとらえることができ、また、「啖呵」に腹を立てることなく、拙著の「意図がどこにあるかを見せつけられるおもしろい」などお持ちになるまでもなく、マルクス・レーニン主義的意図をはっきりと事実によつて示すことができたらはらずであり、したがつて、当然のことながら、「日本共産党の革命路線にたいする異論の書」という、例によつて例のごとき「事大主義的」

「權威依存主義的」言辭を弄して、拙著にケチをおつけになろうという「意図」など生じる余地もなかったはずなのである。

さて、以上のようにして、事実についての「正視」拒否、基本的概念規定の欠如と混乱、粗雑、混同とすりかえ、純然たるベテンという氏独自の「方法」によって、拙著にたいする「事大主義的」「權威依存主義的」やっつけとレッテルはりを美事なしとげられた榊氏は、さらにその全面的打倒を完成するために、拙著の内容の中から、たまたまその眼にふれられた問題点を二、三とりだして、駄目おしの非難の言葉をつらねられている。そこでわれわれは、さらに、榊氏の鋒先の向けられるところについていって、事実どうなっているかということを見究わめておく必要があるのである。そして、おそらくは右の氏独自の「方法」がどんなに遺憾なくその効用を発揮するかということについての駄目おしの例証がそこに数多く見出されることになるであらうし、それによって、「わが国のマルクス・レーニン主義者」の「品性」についてのいよいよ動かしがたい判断材料も十二分に蓄積されることになるであらうと、期待されるのである。